

FT Festival/Tokyo

フェスティバル/トーキョー 16

人材育成プログラム

Documents

F/Tキャンパス 2016 ドキュメント

F/T
Campus
2016

Introduction

フェスティバル/トーキョーでは、舞台芸術作品の上演以外にも、業界内で従事したいと考えている人に向けたインターンシップ・プログラム、市民活動によってフェスティバルを支えるサポーター事業、ワークショップ、レクチャーなどのプログラムを行い、舞台芸術のすそ野を広げ、未来の舞台芸術シーンを支える人材の育成に取り組んでいます。

この冊子では、そんな人材育成事業のうちのひとつ「F/Tキャンパス2016」の活動をまとめました。企画の背景や、内容のご紹介のほか、参加者の熱気あふれる雰囲気をお伝えできれば幸いです。そして本冊子が、手に取ってくださった皆様にとって、人材育成事業の未来を考える契機となることを願っています。

フェスティバル/トーキョー実行委員会

Contents

02 事業概要

選択ゼミ

06 文化政策ゼミ「演劇を取り巻く環境をマネジメントの立場から考えてみる」

09 実技ゼミ「F/Tキャンパスで他者と演劇をつくってみる」

12 理論・評論ゼミ「F/Tキャンパスで観る作品を歴史的・理論的にとらえてみる」

トーク/ディスカッション

16 クリスチャン・ルパ×参加者

20 井手茂太×参加者

24 ファイルズ・スレイマン×ロスリシャム・イスマイル(イセ)×参加者

26 マレビトの会『福島を上演する』稽古モニタリング

報告レポート

28 石田優希子(国際基督教大学 教養学部 リベラル・アーツ学科2年)

29 寺田 凜(東京学芸大学 教育学部 教育支援課程 表現教育コース2年)

30 吉田美音子(静岡文化芸術大学 文化政策学部 芸術文化学科4年)

31 川縁芽偉子(立教大学 現代心理学部 映像身体学科3年)

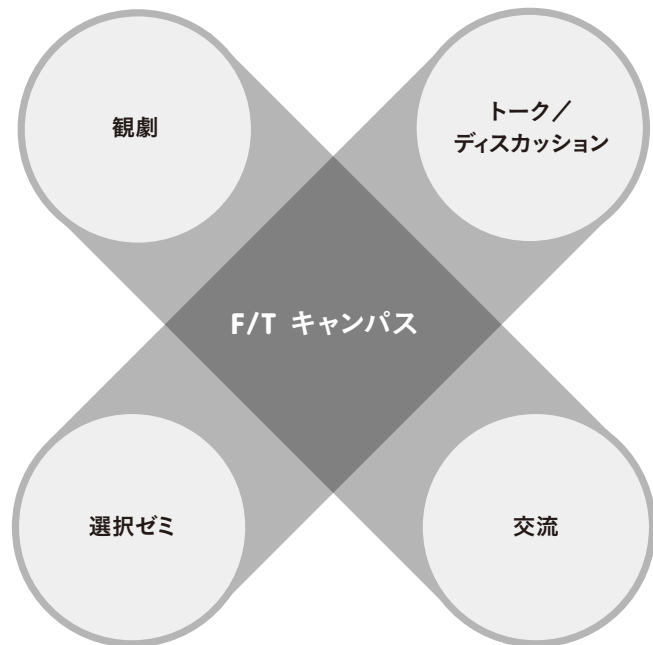
34 あとがき 横堀応彦

About F/T Campus

舞台美術や文化政策に関心をもつ学生が、共に学び、交流する合宿ワークショップ「F/Tキャンパス」。4日間のプログラムを通して、普段の学びや興味関心について考え、仲間とともに未来を切り開いていく試みです。

世界最先端の作品を観劇

F/T主催プログラムの作品を、期間中にまとめて鑑賞。普段、鑑賞しないジャンルと出会う機会にもなります。



多彩な講師による「選択ゼミ」

第一線で活躍する講師を迎え、大学での学びとは異なる分野にチャレンジする学びの機会を提供。

アーティストとのトーク

鑑賞した作品について、アーティストと議論できる「スペシャルトーク」や、クリエイションの過程に立ち会う稽古見学などを実施。

全国各地から集った学生との交流

寝食を共にし、将来のビジョンや観劇体験を共有するなかで、同世代の仲間が生まれます。

事業概要

日程	2016年10月21日 [金] — 24日 [月]
会場	東京芸術劇場、にしすがも創造舎、国立オリンピック記念青少年総合センター
宿泊場所	国立オリンピック記念青少年総合センター
参加費	15,000円 (内訳：宿泊代金、観劇チケット代、交流会費)
参加条件	・学生であること (大学生、大学院生、専門学生) ・3泊4日の合宿プログラムに参加できること ・終了後1ヶ月以内に1,000字程度の振り返りレポートを提出できること
参加者総数	28名+インターン3名 性別 男性6名/女性25名
居住地	関東26名/東海4名/関西1名
参加大学	青山学院大学 総合文化政策学部 総合文化政策学科/大阪経済大学 人間科学部 人間科学科/ 学習院大学 経済学部 経営学科/共立女子大学 文芸学部 文芸学科/慶應義塾大学 経済学部 経済学科/ 国際基督教大学 教養学部 リベラル・アーツ学科/ 静岡大学 人文社会科学部 言語文化学科、文化政策学部 芸術文化学科/大正大学 文学部 人文学科/ 東京大学大学院 人文社会系研究科/東京学芸大学 教育学部 教育支援課程/ 日本大学 芸術学部 演劇学科、芸術学部 放送学科、法学部 新聞学科/ 一橋大学 商学部 経営学科、大学院 言語社会研究科/武蔵野美術大学 造形学部 建築学科/ 明治学院大学 文学部 芸術学科/横浜国立大学 教育人間科学部 人間文化課程/ 立教大学 コミュニティ福祉学部 コミュニティ政策学科、現代心理学部 映像身体学科

Schedule



10.21 Fri.

13:30—15:00	オリエンテーション
15:00—16:00	河合千佳 (F/T副ディレクター) によるレクチャー<F/Tについて>
16:00—16:30	宿泊チェックイン
17:15—19:00	市村作知雄 (F/Tディレクター) を交えた交流会
19:30—21:00	『シカク』(A:女性版) (振付・演出：井手茂太) 鑑賞

自己紹介をしつつ、宿題としてお願いしていた【わたしの3年後/10年後のビジョン】の意思表示をしてもらいました。ワクワク・ドキドキの瞬間。

宿泊は、ユニット型の宿泊施設。ユニット毎に併設されている談話室では、連日夜更けまで観劇体験をシェアしたり、夢を語り合ったり、『POLITIKO』(F/T16主催プログラム)を楽しんだりしていました。



10.22 Sat.

11:00—12:30	クリスチャン・ルバ パブリックトーク
13:30—15:30	選択ゼミ<1日目>
16:00—21:00	『Woodcutters — 伐採 —』(演出：クリスチャン・ルバ) 観劇

一般の人も聞くことのできるパブリックトーク。専門的な質問も多く、ルバの創作の根源に迫るような議論が巻き起こっていました。

[文化政策][実技][理論・評論]の3つのゼミが開講！

上演時間は、なんと4時間20分！
強烈な観劇体験ののち、六本木アートナイトに行く強者たちも。



10.23 Sun.

10:00—10:30	ウォームアップ (『Woodcutters — 伐採 —』の振り返り)
10:30—11:30	スペシャルトーク (クリスチャン・ルバ×参加者)
13:30—15:00	『シカク』(B:男性版) (振付・演出：井手茂太) 鑑賞
15:30—16:15	スペシャルトーク (井手茂太×参加者)
18:00—22:00	選択ゼミ<2日目>

4～5人の小グループに分かれて、感想を振り返りました。

男性版・女性版の2バージョンを鑑賞。「同じ構成・演出でも受け取る印象が異なった」と驚きの声も。

すっかり打ち解けた様子。どのゼミも参加者が主体となって、深い対話が生まれていました。



10.24 Mon.

8:00—8:40 宿泊チェックアウト

9:00—10:30 選択ゼミ〈3日目〉

10:45—12:30 マレビトの会『福島を上演する』(作・演出:マレビトの会)
稽古モニタリング

13:30—15:00 スペシャルトーク
(ファイルズ・スレイマン×ロスリシャム・イスマイル(イセ)×参加者)

15:15—17:00 合同ゼミ〈選択ゼミで行った内容のシェアと振り返り〉

18:00—20:30 振り返り

本番を控えた作品の稽古を見学し、アーティストとのディスカッションを実施。率直な感想にアーティスト側も気づきが多かったようです。

アジアで活躍するアーティストの力強いメッセージに、涙を流す参加者も！

実技ゼミは2日間で作った小作品を上演。文化政策ゼミと理論・評論ゼミはどんな話し合いがなされたのか、内容をシェアしました。

期間中の体験を振り返り、濃密な4日間が終わりました。終了後の宿題として、F/Tキャンパスの体験を振り返る事後レポートと、【(いまの)わたしの3年後/10年後のビジョン】を提出してもらいました。

Group Seminar

選択ゼミ

第一線で活躍する多彩な講師を迎え、大学での学びとは異なる分野にチャレンジする「選択ゼミ」を開講。参加者は【文化政策】【実技】【理論・評論】の3コースから1つを選択し、ディスカッションを交えながら関心をひろげました。



国立オリンピック記念青少年総合センター

【文化政策】稲村ゼミ〈演劇を取り巻く環境をマネジメントの立場から考えてみる

日時 | 10月22日[土]13:30-15:30 / 23日[日]18:00-22:00 / 24日[月]9:00-10:30、15:15-17:00(合同ゼミ)

場所 | 東京芸術劇場ミーティングルーム1、国立オリンピック記念青少年総合センター(センター棟507・カルチャー棟練習室10・センター棟106)

参加人数 | 11人(うち1名インターン)

講師 | 稲村太郎((株)ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室)

内容 | 今年で9回目を迎えるF/Tは、社会にどのようなインパクトを与えてきたのか？ そもそもプロジェクトやプログラムの評価とはどのように行われるのか？ ロジック・モデルという手法を用いてフェスティバルのもたらす成果や効果について考える。

10月22日[土] 東京芸術劇場ミーティングルーム1

13:30 インタロダクション(概要+自己紹介)

自己紹介は二人一組になり、ペアの相手を全員に紹介するという形式をとった。ゼミ初日のため緊張している学生も多かったが、お互いの興味や将来のビジョン、趣味などを共有したことで緊張感もほぐれていった。

14:30 【概説】プロジェクトの評価とロジック・モデルについて

配布された資料をもとにロジック・モデルの説明を聞き、プロジェクトの評価にどのように使われるのかを学んだ。

15:00 【演習】個人の体験として、演劇が与える影響や変化の可能性を考える

事前課題で各自が抽出してきた自身と演劇との関わりについて、結果(アウトプット)、成果(アウトカム)、波及効果(インパクト)の順に整理した。

10月23日[日] 国立オリンピック記念青少年総合センター(センター棟507)

18:00 【発表】個人の体験として、演劇が与える影響や変化の可能性を考える

前日に整理した自身と演劇との関わりについて発表。内容は各々のバックグラウンドに広がり、演劇に対する考え方の共有にも繋がっていた。また、演劇の可能性や課題に対して、他者の意見を聞くことによって演劇への新しい視点を持つきっかけとなり、大変興味深い発表になった。

19:30 【演習・発表】F/Tキャンパスのインパクトを考える

F/Tキャンパスに関わっている人を挙げ、それらの人々がF/Tキャンパスによってどのような影響をうけるのかを小グループで意見を出し合った。2年連続での参加者があり、インパクトを身近な例から考えることができた。また、F/Tキャンパス担当スタッフの横井から、目的やねらいなどについての説明もあり、参加者がここまでの感想を交換するなど盛り上がった。

20:30 【演習・発表】F/Tのインパクトを考える

次にF/T全体のインパクトを、F/Tキャンパスのインパクトを考える際と同様の順序で考えた。F/Tに関わる人の多さと影響力を感じることができた。その後、合同ゼミの発表内容を確認。

10月24日[月] 国立オリンピック記念青少年総合センター(カルチャー棟練習室10・センター棟106)

9:00 【演習・発表】F/Tのインパクトを考える

F/Tに関わっている人の中から対象を①公演事業(観客)②公演事業(アーティスト)③サポーターに絞り、3グループに分かれて分析し、全体に共有した。各グループが発表した内容を表に整理することで、インパクトをより明確にすることができた。

10:00 【概説】ロジック・モデルについてのまとめ

ロジック・モデルはプロジェクトを客観的に見ることができるといえるという利点がある一方で、予測不可能な物事には目をむけることができないという難点があることも理解することができた。

15:15 合同ゼミで発表

稲村先生よりロジック・モデルと3日間のゼミ内容を説明。その後F/Tキャンパスのインパクトを結果、成果、波及効果の順でグループごとに発表した。最後に統括及び質疑応答を行い、発表を終了とした。

文責：西島彩貴(インターン)

演劇の世界を語る

講師：稲村太郎

今回でF/Tキャンパス(以下、「キャンパス」)の参加は2回目であった。昨年にはしすがも創造舎への通学と代々木公園の近くの宿舍での合宿を選ぶことができたが、今年は基本的に全員、合宿することになっていた。そこで、私も2日目から2泊3日、学生と起居をともにした。

朝と昼はアーティストとのスペシャルトークやゼミ、夜はにしすがも創造舎や東京芸術劇場で観劇をするといった盛りだくさんのプログラムで、さらに真夜中の2時まで学生と語り合うなど、自分も学生に戻ったかのような日々であった。短期集中で非日常の世界に浸るキャンパスは、まさに、フェスティバルの醍醐味とも言える。

そんなキャンパスが終わってしばらくは、さすがに何にも手が付けられなかった。おそらく、学生の活力に乗せられて張り切り過ぎたという理由もあったと思うが、今から考えるとそれはある種の興奮から覚めた状態であったと思う。学生から投げかけられた素朴な疑問や質問、また、それらについて語り合った議論が頭の中でフラッシュバックしていた。

特に印象的だったのは、「演劇に関わることで、あらゆる人の人生がポジティブに変化する」という演劇万能説に、私は疑問を持っている」という発言であった。この文章だけを抽出すると、一見、ネガティブにも聞こえると思うが、とても考えさせられる意見であった。そこで、今年のキャンパスを振り返りながら、



マネジメントの立場から演劇の世界を語るることについて書いていきたいと思う。

今年のゼミも昨年と同様に、フェスティバル/トーキョーの成果や効果について考えることを最終目標とする内容であった。そして、今回はその準備として、事前にいくつかの質問について考えてもらった。

以下が、その質問である。

• これまでに演劇があなたに与えた影響や変化はありますか。もしもあれば、具体例を箇条書きにしてください。

• 社会において演劇はどのような役割や影響力を持っていると思いますか。アイデアを箇条書きにしてください。

• 社会においてフェスティバルはどのような役割や影響力を持っていると思いますか。アイデアを箇条書きにしてください。

1つ目の質問は自分自身の体験を振り返りながら、演劇が与える影響や変化を考えてもらう意図があった。そして、その他はフェスティバル/トーキョーの成果や効果を考えるための準備を視野に入れたものであった。

当日、1つ目の質問からゼミを始めたのだが、この質問に対する答えから思いの外に議論が広がった。まず、「演劇から世界を知るきっかけになった」という意見があり、そして、「演劇を通じて価値観を共有できた」といった意見や「人前で話すのが苦手だったが、演劇を始めたことで自信がついた」となどという意見があった。また、なかには、高校演劇で『あゆみ』を見て、演



劇に興味を持ったという学生もいて、しかも、ゼミでその話をするまで、その作品がキャンパスの講師の1人、柴幸男さんの作・演出だと知らなかったという、キャンパスへの参加が運命的とも思えるエピソードもあった。

その他にも様々な意見があったが、総じて言うところ「自分の居場所が見つかった」という意見が多くあったと思う。演劇と出会い、その演劇がその人を肯定してくれる場になったという具合だ。

演劇に対してポジティブな意見が多い中で、ある1人の学生が「演劇に関わることで、あらゆる人の人生がポジティブに変化する」という演劇万能説に、私は疑問を持っている」と発言した。一見、ネガティブにも聞こえるが、これは文化政策の中でも気をつけなければいけないことだと思った。成功事例というものは無批判に美談として語り継がれる傾向がある。そして、それはある意味で固定概念を生む可能性がある。

話がわき道に逸れるが、私が担当したゼミは「文化政策」という選択ゼミで、「演劇を取り巻く環境をマネジメントの立場から考えてみる」というタイトルであった。今年は「マネジメントの立場から考える」ことにこだわりのあった。

一般的に、事業の成果や効果については、文化政策の文脈で語られることが大半で、その場合、施策や事業がいかにその目的を達成できたのかを見定める「事業評価」で扱われる。そして、それは行政の立場からの視点、つまり、「評価をする」立場の道理から考えられることが少ない。一方で、「評価をされる」立場は誰なのかと考えたときに、それは主に制作者や運営者等のマネジメントの立場にある人々である。

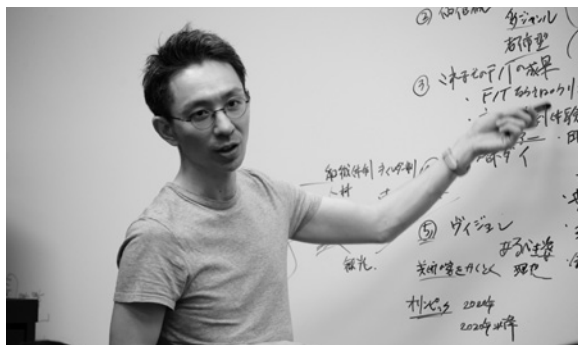
「評価をする」側がしっかりとした評価基準を定めることも重要だとも思うが、それと同様に「評価をされる」側が自分たちのミッションやビジョンを踏まえ、自発的に事業の成果や効果を考えることが重要だと思っている。その思いから、萩原先生が担当する「理論・評論」で演劇作品を言説化する試みが行なわれていたように、このゼミでは演劇が実践されている世界に

ついて言説化を試みたいと考えた。

それでは、なぜ、作品に以外に言説化が必要なのかという問いがある。普段、演劇に触れる機会が多い人にとって、その必要性を説く必要はないかもしれない。しかし、そうではない人やそもそも芸術と呼ばれるものにあまり関心がない人に、演劇という世界を伝えるポキャブラリーも必要だと考えている。

その後のゼミの内容については、誌面の都合もあるのでここでは省略するが、一言でいうと、フェスティバル/トーキョーを題材に演劇を取り巻く環境を分析し、その環境の中でどのような変化が生まれるのかをロジック・モデルというフレームに整理した。

今年のロジック・モデルは、昨年のロジック・モデルとも異なるもので、異なるメンバーが集まれば、異なる図ができる。しかし、実際は自由に意見を交わす議論の場、そして、それをまとめる場をつくるのは容易ではない。そのような意味で短期集中で非日常の世界に浸るキャンパスは普段と異なる視点で演劇の世界を語るができる貴重な場だと思う。何よりも演劇万能説への問いのようなクリティカルな意見もあったのである。



稲村太郎 Taro Inamura

(株)ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室
1976年生まれ。大学卒業後、民間の複合文化施設で現代美術の展覧会の企画・制作を担当。現在、株式会社ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室の研究員、公益財団法人セゾン文化財団のプログラム・オフィサーを務める。文化政策では、事業評価やアーティストのモビリティに関するリサーチを行っている。

Group Seminar

2 〔実技〕 柴ゼミ〉F/Tキャンパスで他者と演劇をつくってみる

日時 | 10月22日[土]13:30-15:30 / 23日[日]18:00-22:00 / 24日[月]9:00-10:30、15:15-17:00(合同ゼミ)

場所 | 東京芸術劇場ミーティングルーム7、国立オリンピック記念青少年総合センター(センター棟300・カルチャー棟練習室41・センター棟106)

参加人数 | 11名(うち1名インターン)

講師 | 柴 幸男(劇作家、演出家、ままごと主宰)

内容 | 舞台芸術作品は、どのようなプロセスを経て創られるのか。自分自身の体験を観察し、メンバー(=他者)とともに小作品を作るなかで、演劇創作の根本を体験する。

10月22日[土] 東京芸術劇場ミーティングルーム7

13:30 シアターゲーム

「数字ジャンプゲーム」と「椅子とらせないゲーム」を行った。ゼミとして集まるのはこの時が初めてだったため、シアターゲーム内で起きた笑いがゼミの雰囲気をはくしていた。

14:30 不必要なものを紹介する

事前に出ていた宿題「今回のキャンパスに『不必要なもの』を1つ持参する」にモノの説明・自分との関係・題名をつけ、紹介した。キャンパスだけではなく、自分にとって不必要なもの解釈するゼミ生もおり、みな興味深く聞いていた。また、発表からはゼミ生の普段の生活やキャラクターが垣間見えた。

14:50 「かんざつ」を体験する

3分間、部屋の中で起こったすべての音を書き取るワークを実施。その後、同様に部屋を見回し、各々が気になるものと自分の結びつきをテーマにした小作品を創作。二人一組に分かれて発表し合った。最後に「キャンパス中に気になることを思い出しておく、探しておく。また、小道具があればよりよい。」の宿題が出された。

10月23日[日] 国立オリンピック記念青少年総合センター(センター棟300)

18:00 「キャンパス中に気になったこと」に題名をつける

前日の宿題に各自で題名を付けた。題名を発表したのち、講師より題名の分類についてレクチャーを受け、グループ化した。

19:00 「キャンパス中に気になったこと」再現する

前のワークで決めた3名程のグループで宿題をもとに小作品を創作。エピソードを1つ選択、同グループで演出した。3つの方法(①説明なしで上演、②説明したのちに上演、③上演と上演の間に説明を行う)から形式を選んで発表した。

20:00 複数の作品を繋げて上演する

グループ内で複数の作品を繋げ、再構成した。発表の際、説明に「関係ありそうでなさそうな個人的な情報を入れる」という要素が追加された。最後には繋げた作品の中に事前の宿題である「不必要なもの」を混ぜて創作。作品化に至らなかったグループは過程を共有し、話し合いの中で深めた。この日は「自分自身をかんざつする」をテーマにしたゼミ活動を行った。ゼミ初日に出た宿題が自分にとってどんな意味を持つか、選んだ理由をより深く考えようということ解散した。

10月24日[月] 国立オリンピック記念青少年総合センター(カルチャー棟練習室41・センター棟106)

9:00 小作品たちを1つの作品にする

合同ゼミでの発表にむけて、グループで創作した小作品を講師を含めた全員参加の上演形式に編成した。グループは崩さず、全員で意見を出し合いながら演出を決定。グループが使っていた小道具が全体演出の鍵になった。キャンパスで観劇した作品の要素を取り入れていくこともあった。

15:15 合同ゼミ

合同ゼミでは午前中に創作した作品を発表した。創作過程を知らない観客への提示方法にも工夫が必要であることや、個人、小グループなど各々がいる枠組みによって「他者」が変化していくことを色濃く実感することが出来た。

文責：雨宮彩乃(インターン)

高校生や大学生との活動が最近、増えてきました。意図的に増やしているというのが正しいかもしれません。それは僕がもはや若者ではなく、彼らは僕にとって他者になったからだと思います。

今回、F/Tキャンパスで僕が担当したのは実技のゼミでした。メンバーは11名。自分や他人の身体を使って演劇をつくってることが目的です。僕はこのゼミの題名を「他者と演劇をつくる」としました。僕にとって演劇とは他者と関わる行為そのものだからです。参加者には自己探求ではなく、限られた時間で他者といかに関わるのかを体感してもらいたいと考えました。

心地よい緊張の初日、まずは自己紹介。各自が持ち寄った「不必要なもの」について語ってもらいました。僕が彼らに課した宿題です。彼らが何を持ってきてどう語るのか、興味があったのです。不必要なものは不必要であることが決した瞬間に必要なものになるのではないかと。ひとりの疑問から全員での短い議論が起こりました。これは予想外の発展で、その疑問は僕がまさに演劇について考えていることでもあり、本質的な良い脱線だったと思います。この時点で「語る」ことに積極的な参加者が集まっていると感じました。

その後は、僕の創作プロセスをつかってひとりずつ短い演劇を創作してもらいました。部屋を観察する、気になるものを選ぶ、題名をつける。さらに、自分のエピソードをこじつけて上演する。参加者同士で発表しあい、全員に作者と観客の両方を体験してもらいました。

そして次の日までの新たな課題へ。それは、このF/Tキャンパス中に「気になるもの」を探すこと。善悪や美醜ではなく、気になるものを探す。他者とは主義や意見が一致しない人です。演劇は、その他者と共につくり観客という更なる他者に見せる行為です。だから演劇はひとつの意見を語るのではなく、答えがわからないものを他者と探求すると考えた方が作りやすい。そんな話をして初日は終了しました。

2日目は個人創作から集団創作にトライします。3人ずつのチームに別れ、時間内にそれぞれの気になるものをすべて含んだ演劇をつくってみる。面白いかどうかではなく、時間内に形のないものをまとめることが出来るかが重要です。僕は手を貸さず、各チームの発表を楽しみに待ちました。

僕の予想を超えて、すべてのチームが見事にひとつの作品に仕上げてきました。個人の意見や主張とは違う、無意識の集合のような不思議な演劇たち。それは彼らが集団創作という摩擦をクリアした結果でした。



創作を共にした他者は、他者でありながら等しく作品の当事者となります。この束の間の当事者関係が、良くも悪くも演劇の最大の特徴だと思います。

予想以上の結果に僕は、その無意識に名前をつけたり、更なる深化を彼らの創作に求めました。何か、彼らの世代の共通項にまで落とし込めるのではないかと予想したのです。しかし、これが難しかった。この創作に各チームが手間取っているうちに、2日目は時間切れとなりました。

その晩、僕は彼らと同じ宿舎に泊まって、今夜の創作の停滞について考えました。今日のゼミで彼らは集団創作を成し遂げた。僕は進行者として、更なる創作を求めた。そのためにキーワードのようなものを彼らに見つけ出させようとした。この「求めた」「見つけ出させようとした」というのは僕がしたこと。さて僕は、彼らにとって、当事者か、他者か。明日以降、どうやってゼミを進めるか。予定通り、全員での創作を試みるか。もっと簡単な創作方法にシフトするか……。自問自答を繰り返しながらたどり着いたのは、もし僕が大学生だったら彼らと共にF/Tキャンパスに参加したかった、という素朴すぎるほど素朴な気持ちでした。

最終日の朝。僕は彼らに相談をしました。進行ではなくて相談です。僕自身も彼らと当事者になり、12名でひとつの作品を作りたい。そして、その作品を他者に見せたい。僕は外部から彼らに活発な演劇的創造を求めた。しかし上手くいかなかった。ならば、僕も内部になり共に演劇的創造に到達してみたい。彼らはその提案を快く受け入れてくれました。

その後は全員で昨日までの小作品やその他の要素をどんどん紡いでいきました。12人での創造という作業に最初は戸惑い気味だった彼らも自由にアイデアを提案するようになりました。ただ聞いているだけではつまらないから全員で動いてみたら。窓の話をしているときに実際に部屋にある窓に移動してみたら。初日に観劇したイデビアン・クルーの振り付けを応用してみたら……。

結果的に大人数での合意のプロセスを短時間で的確に行うことができ、時間内にひとつの作品をつくることができました。僕がいつも稽古場で求め、束の間体験している、本当に創造的な時間があったと思います。この時間を生み出し、全員で共有できたことが本ゼミ一番の達成です。

各ゼミごとの最終発表、彼らは最初に発表することを望みました。忘れそうだからと言いつつも、早く発表したいような熱が彼らの中にあっただような気がします。本番は、細かいミスはありながらも全員が束の間の当事者として観客へ向けていたと思います。

F/Tキャンパスの参加者はみな、好奇心が旺盛で、他者と積極的に関わろうという人たちでした。どのゼミもとても楽しく濃密な時間が流れているようでした。しかし反対に、彼らの日常はどうなのだろうかと思いました。日常、彼らのエネルギーはどこに向かっているのか。彼らと共に行動し、対話出来る人がどれだけまわりにいるだろうか。若者は誰もが孤独で、彼らの中にも特に孤独なのかもしれない。もしかしたら、彼らのような孤独な若者たちのために都市の芸術や演劇はあるのかもしれない。そんな妄想を僕はしていました。本当に余計なお世話ですね。でも、もし本当にそうだとしたら今回、F/Tキャンパスで彼ら同士が出会えたことは本当に良かったと思います。しかし、もっと沢山話したかった。これが今の本当に正直な気持ちです。



柴 幸男 Yukio Shiba

劇作家、演出家、ままごと主宰
青年団 演出部所属。急な坂スタジオ レジデント・アーティスト。多摩美術大学専任講師、四国学院大学非常勤講師。東京の劇場から北九州の船上まで、新劇から学芸会まで、場所や形態を問わない演劇活動を行う。2010年『わが星』で第54回岸田國士戯曲賞を受賞。2015年に再々演された同作は東京・小豆島で約9000名を動員。近年は小豆島や横浜に長期滞在し地域に根ざした演劇を継続的に上演。2014年より『戯曲公開プロジェクト』を開始、過去の戯曲を無料公開している。



3 [理論・評論] 萩原ゼミ) F/Tキャンパスで観る作品を歴史的・理論的にとらえてみる

日時 | 10月22日[土] 13:30-15:30 / 23日[日] 18:00-22:00 / 24日[月] 9:00-10:30、15:15-17:00(合同ゼミ)

場所 | 東京芸術劇場ミーティングルーム5、国立オリンピック記念青少年総合センター(センター棟506・カルチャー棟練習室11・センター棟106)

参加人数 | 9人(うち1人インターン)

講師 | 萩原 健(明治大学国際日本学部教授)

内容 | F/Tキャンパスで観劇する作品は、演劇の歴史や理論をふまえると、どのように捉えることができるのか? 映像資料や事前に配布した資料などを交えながら演劇作品について議論する。

10月22日[土] 東京芸術劇場ミーティングルーム5

13:30 自己紹介・発表担当決め

ファーストネームと大学での専攻を共有。「演劇史」や「演劇と教育」などを学ぶ、多様なメンバーが集まった。学んでいる内容をふまえて、最終日の合同ゼミの発表で各自が担当する部分を決定した。

14:00 クリスチャン・ルバ パブリックトークの振り返り

印象に残った話やキーワードをあげて、それを掘り下げていくかたちで議論が進んでいった。1人が出したキーワードに対して、周りの人がメモしていた情報や知識で補いながら、深めていくことができた。

15:00 『Woodcutters – 伐採 – 』(以下『伐採』)の予習

パブリックトークの振り返りをもとに、夜に観劇する『伐採』の予習を行った。振り返りで疑問に残っている部分を解消すべく、観劇する際に注目すべき場面を話し合った。

10月23日[日] 国立オリンピック記念青少年総合センター(センター棟506)

18:00 『伐採』の振り返り

前日に観劇した『伐採』で、舞台上での出来事を覚えている限りあげていき、物語の順番になるように整理した。

19:30 クリスチャン・ルバ スペシャルトークの振り返り

前のワークで整理したものをもとに、スペシャルトークでルバから聞いた話を物語の中に当てはめていった。

ここで、ゼミの進め方について参加者から意見があり、少し進め方を変えることになった。初日のゼミでは、合同ゼミの発表で1人がひとつのテーマをもって発表するという予定だったが、ルバ・グループと井手グループ。

20:15 『シカク』の振り返り

午後に鑑賞した『シカク』の振り返りを行った。出演者の衣装に着目して登場人物を国に見立てた萩原先生の解釈に全員が驚いた。そこから、ひとつひとつの場面を思い返して、どんな意味が込められていたのかを全員で探していった。

21:30 『伐採』と『シカク』の共通点がし

それぞれの振り返りでの議論をふまえて、『伐採』と『シカク』の共通点を話し合った。「フレーム」というキーワードがあたり、どちらも観客が舞台を覗き込んでいるような構成になっている点で似ているという意見でまとまった。

10月24日[月] 国立オリンピック記念青少年総合センター(カルチャー棟練習室11・センター棟106)

9:00 マレビトの会『福島を上演する』稽古モニタリング、ファイルズとイセのスペシャルトークの予習

午後のプログラムに向けて予習を行った。事前の知識が少なかったため、チラシやネットでの情報をもとに、気になる点について意見交換をした。例えば、原子力発電を題材にした舞台にどんな演目があるかなどを考えた。

10:00 合同ゼミにむけた発表の打ち合わせ

ルバ・グループと井出グループに分かれて、合同ゼミの発表に向けた打ち合わせを行った。短い時間の中で、萩原ゼミで学んだことを十分に伝えたい!と参加者からの熱が伝わってきた。

15:15 合同ゼミで発表

2グループに分かれての発表だったが、双方に相手グループへの発表への補足をするなど、事前に決めていた内容を越えて、ゼミでの熱い議論の様子が伝わるような発表となった。

文責：篠原光(インターン)

ゼミを振り返って

講師：萩原 健

筆者のゼミでうたったのは、「F/Tキャンパスで観る作品を歴史的・理論的にとらえてみる」ことだった。方針として、鑑賞対象の公演や各種トークほかについての予習・復習をゼミの時間に行うなかで、関連する演劇史・演劇理論についての補足をすることにし、当日に臨んだ。また受講者が事前に目を通しておくテキストとして、クリスチャン・ルバ氏のこれまでの仕事を概観した英文記事と、井手茂太氏への日本語インタビュー記事を指定した。

3泊4日の日程中、受講者と同じ宿泊施設に筆者も3泊したが、このことは実に有意義だった。というのも、ゼミの時間枠の外で、受講者と多く言葉を交わすことができ、そのさい、劇場内外での気づきが、演劇史や演劇理論の話へ、あるいは現在進行形の国内外の演劇シーンの話へと接続していくことがしばしばだったからだ。そして、ゼミの時間外だったということで、受講者も筆者も打ち解けた雰囲気の中、お互いをさらに知ることができ、より率直な意見の交換ができたように思う。

1日目、筆者は晩のイデビアン・クルー『シカク』女性版の鑑賞から合流、公演後に宿泊施設へ向かったが、ここで早速、受講者たちとマレーシアの政治カードゲーム『POLITIKO』に夜更けまで興じた。さきに言及したばかりの、打ち解けた場であり、

ここで受講者といわば良いチューニングができた。

2日目は午前にゼミ第1セッション(2時間)。各メンバーにファーストネームと、演劇の何を学んでいるか(演劇の何に関心があるか)のみで自己紹介をしてもらい、そのあとにゼミの流れを説明した。すなわち、4日目の合同ゼミでの発表(各ゼミ20分)をゴールとし、ここでゼミのメンバー全員が発表をする。メンバー各自には担当箇所がある。この担当箇所は、3回あるゼミの時間で扱う各トピックに対応している(「公演Aの予習」「公演Aの復習」「公演Bの予習」等々)。各メンバーは、発表担当箇所のトピックが議論されるさい、メモを取り、合同ゼミでの発表に備える。この説明のあと、自己紹介のさいに聞き出したメンバー各自の学び(関心)に即して、発表担当箇所を受講者に選んでもらった。そして残り時間でルバ演出『Woodcutters – 伐採 –』の予習を行い、ゼミ第1セッションは終了。晩、『伐採』公演前のルバ・パブリックトークに臨席、そのあとに『伐採』を鑑賞して一日を終えた。

3日目は午前を受講者のためだけのルバ氏によるスペシャルトーク、午後に『シカク』男性版鑑賞と井手氏スペシャルトーク。そして晩になってゼミの第2セッション(4時間)が行われた。『伐採』公演を含むルバ関連のイベントについて、レビューと分析を行うことから始めたが、これを終えたところで、受講者とゼミの進め方について協議をし、方針の転換をした。すなわち、





ここまでは受講者からの発言をできるかぎり集め、筆者からは補足をするを基本としていたが、これをあらため、続く『シカク』関連イベントのレビューと分析以降、より筆者による理論・演劇史関連の講義を多く盛り込んだ内容とした。

4日目は午前ゼミ最後の第3セッション(1時間半)。セッション前半は、同日午後に行われるマレビトの会の稽古モニタリングとマレーシアのアーティスト2人によるスペシャルトークおよびワークショップのための予習を行ったが、これらは基本的な事項の確認とし、また合同ゼミでの発表対象からは除外することにした(これは当日ゼミ冒頭での筆者の提案だった)。セッション後半は合同ゼミでの発表に向けた準備で、ルバ・グループと井手グループの2つのグループ発表を行う段取りとした。そしてマレビト・マレーシア関連イベントのあとに開かれた合同ゼミで、メンバーによる発表が行われ、夕食後、キャンパス参加者全員によるふりかえりで結びとなった。

前回と今回のF/Tキャンパスで異なったのは、受講者が鑑賞・参加する対象の演目・催しのジャンルが多岐にわたっていたため、ゼミで扱う内容の構成に工夫が要り、適切な進行形式を見つけることが困難だったことである。さらに今回の受講者は、F/Tが指定した大学からではなく、公募に応じてやってきた。つまり、個人で感度の高いアンテナを日ごろから張り、F/Tキャンパスという催しに反応した受講者が目立った印象だった。

最終日4日目の結び、ふりかえりのなかで筆者は、美術史に関するある受講者の質問への応答の一部として、およびキャンパス受講者全員への最後のコメントとして、次のような内容を述べた。すなわち、理論・評論とは「言語化」の営みであり、言葉にされ書き残されたものが歴史となっていく。そうして選取られたテキストの集積である美術史・演劇史を学ぶことは、特定の時代や文化圏の価値基準を知ることである。そして、気になったことがらを追究する行いである「リサーチ」と、そうして自分のなかに蓄積されたことごとについて語ったり書きとど

めたりする(=言語化する)行いである「アウトプット」こそが、これまで主に受動的な学びを旨としてきた一部の受講者にとっては今後、肝要である——実際、受講者からの発言をできるかぎり集めるといふ当初のゼミの方針は、一部、こうした考えに基づいたものだった。一方、少なくとも筆者のゼミでは、おそらく一部の受講者に、予期・期待していたゼミのイメージがあった。このイメージと、当初の筆者の考えとのずれから、ゼミ第2セッション中盤での受講者との協議、および進行方針の変更は行われた。先述の、適切な進行形式を見出すための困難も背景にあった。新しい解を見出す作業は極めて手探りで、簡単ではなかった。だがその一方、筆者だけでなくゼミ受講者の全員に、これは貴重な、それこそ演劇的な、「生(なま)」ならではの経験として共有されたように思う。このことを始め、今回のF/Tキャンパスは、前日に輪をかけてスリリングで刺激的な時間だった。

受講者にとっても筆者にとっても、困難の克服という課題を提供し、成長の機会を提供してくれる、F/Tキャンパスの次の姿を今から楽しみにしている。



萩原 健 Ken Hagiwara

明治大学国際日本学部教授

1972年東京都生まれ。研究テーマは20世紀以降のパフォーミング・アーツ、その歴史と異文化間交流(主に日本とドイツ)。著書に『演出家ビスカートアの仕事 ドキュメンタリー演劇の源流』、共訳にフィッシャー・リヒテ『パフォーマンスの美学』ほか。これまでフェスティバル/トーキョーが招聘したりミニ・プロトコルの作品群を中心に、戯曲翻訳、通訳、字幕翻訳・制作・操作も多く手がける(萩原ヴァレントヴィッツ健、『資本論 第一巻』(F/T09春)には出演)。

Talk/ Discussion

トーク／ディスカッション

期間中に鑑賞した作品のアーティストと参加者だけで話す

「スペシャルトーク」を行いました。

さらに、マレーシアのアーティストを招いてのトークやグループワーク、マレビトの会『福島を上演する』の稽古見学&ディスカッションも実施し、クリエイションの源泉に触れる機会になりました。

クリスチャン・ルパ×参加者

日時 | 10月23日 [日] 10:30—11:30

会場 | 東京芸術劇場 アトリエーエスト

——昨晚観劇した『Woodcutters — 伐採 —』で翻案・美術・照明・演出を務められたクリスチャン・ルパさんにお越しいただきました。限られた時間ですが、皆さんからの質問や感想にお答えいただく形で進めたいと思います。

舞台上の赤い線

学生A: 照明と音響についてお話を伺いたいと思います。舞台と客席を区切るように照明で赤い線が引かれていて、ベルンハルト役の俳優がその線を客席側に越えた時に客電がつくことが気になりました。音響の面では、天井や舞台の上下左右から声が聞こえてきました。僕はそれらが観客の感情移入を阻害する異化的な効果をもたらすように感じたのですが、ルパさんはどのような意図を持っていらっしゃるのかお聞きしたいです。

ルパ: その読解はすごく面白いですね。まず赤い線は私の色々な作品に登場します。この線はもちろん観客の世界と俳優の世界を分けるものですが、線が赤いこともまた重要です。赤は危

険性を表しているのです。出会わなければならない2つの世界があるとして、その線を越えてしまうことがいかに危険かを示しています。例えば第1幕中盤「セバスチャン広場」の場面を思い出してください。そこでは死んでいるはずのヨアナが、人々から呼び出され生き霊のようにして現れます。彼らがセバスチャン広場で過ごした時代の懐かしい思い出がその場に現実化するのです。その当時、ヨアナは客を招いては自分が最近読んだ本の話などをしていました。つまり彼女自身が生きた作品であったと言えます。彼女は「芸術とは森であり、赤い線は森を見渡せる場所である」と言っていますが、彼女自身に線を越えさせることでその赤い線を越えるモチーフを表現しました。

音についてですが、私はある種のコスモス(宇宙)を音響によって作ろうと考えました。つまり、あることが起きたらそのことに対する反応が必ず起きるようにしたい。宇宙の中で起きたことが観客の中にはっきりとした反応を引き起こすような音響にしたいと考えました。例えば1幕終わり「裸の女王様」の場面で、観客はその場面に魅了されていると同時に恐怖も感じている。その感覚を音によって表そうと考えました。また私はいつも俳優たちに「観客席に何らかの音声が生じたら、それに反応せよ」と伝えています。例えばクシャミをする人がいれば、そのクシャミが俳優自身の創造力を刺激するように常に感受性を広げておくのです。そして私自身も閉じられた宇宙に対して反応する人間になりたいと思っています。上演中はいつも客席後方に座って、俳優に向かって語りかけたり、歌を歌ったりしているのですが、それは宇宙の外側から毎回違う宇宙に対する作者の反応です。

「内的独白」の考え方

学生B: 昨日のパブリックトークでスタニスラフスキーから受けた影響について少しお話されていましたが、ルパさんが考える演劇論、特に「内的独白」の考え方についてお聞きしたいです。

ルパ: 私は大学の授業で「まず独白から始めなさい」と言っています。最初は人に話しても恥ずかしくない個人的な独白から始め

ます。すると人の内側にある思いを外に表現する際、それを作り変える意識の流れが出現します。我々が口から語ることは、自分の意識の中に流れているものは異なる場合があります。予感したことや気づいたことが同時に言葉になるのです。

もしあなたが俳優ならば、次のような実験を試してみてください。最近2日間のことを思い出して、その中からあなたの記憶に強く残っている2分間を思い出してください。そしてその2分間を「内的独白」として書き出すのです。見聞きしたことを描写するのではなく、そのとき生まれつつある感覚を現在形の時制でなるべく正確に書いてください。これは私が「内的独白の文法」と呼ぶるので、私たちの想像力を鍛え上げる最良の方法です。

役作りをする際には、この方法を使って自分の演じる役の置かれた状況について考えてみます。想像するのは脚本に書かれている時間でなくても構いません。例えばハムレット役を演じるなら、彼の子供時代を想像して母親との葛藤や対立を自分で物語ってみるのです。既知を知っていることを書くのではなく、自分の考えを挑発するように書いてください。このようにして自分を新しい思考に向けて絶えず挑発し続けていきます。考えが考えを挑発していく、このプロセスを私は「旅」と呼んでいます。あなたが内的独白を書くのは、知っていることを書くのではなく、モノローグを書くことによって知るのです。

「旅」を行うにあたって、大事なことがもう1つあります。舞台上上がる際、これをしなければいけないという定形を決めて

はいけません。それではただの人形ですから。自分の中にある思考のプロセス、想像力のプロセスを目覚めさせ、常にそれらを動かすようにします。観客席で起きたクシャミが俳優の内的独白をかき立て、俳優たちは想像力を働かせて演技に反映させます。そのようにして俳優の演じ方が変わるのです。

音楽や小道具による効果

学生C: 第2幕でラヴェルの「ボレロ」が2回違う形で使われていましたが、なぜこの曲が使われたのでしょうか。

ルパ: 「ボレロ」は実在のヨアナ・トゥルが好きで、セバスチャン広場に集まる人々にとっては強迫観念の対象でした。作品のどの部分でボレロが流れたかを思い出してください。ゲアハルト・アウアースベルガーが酒に酔い、他人に対する振る舞いが攻撃的になっている。そんな場面で彼の妻であるマヤが一度目のボレロをかけました。1つのフレーズが繰り返される悪魔的な音楽が、酔っ払っている人々を覆い尽くすのです。

その後人々の思いが高まると、2回目のボレロが流れます。

知っていることを書くのではなくて、モノローグを書くことによって知るのです。——クリスチャン・ルパ



他の人々に開かれた気持ちになることが大事です。

クリスチャン・ルパ

ヨアナが生き霊として現れて自分の思いを伝え、他の俳優たちがモノローグを語ります。ちなみにこのモノローグは原作には書かれておらず、それぞれの登場人物が素面のときには絶対に言えないことを俳優たちが想像して書いた内的独白のテキストです。

学生D：作品の途中でベルンハルトが片方の靴下を脱ぐ場面がありましたが、とても性的な感じに見えて印象的でした。

ルパ：実はあの場面で片方脱いでいる靴は、原作者トーマス・ベルンハルト自身の靴なんです。ベルンハルト役を演じるピョートル・スキバには少し小さいサイズなのですが、彼は「この靴を脱ぐことで僕は芝居から自由になれる」と言っています。彼は上演中ベルンハルト本人の靴を身につけることで、原作者が自分の演技に満足しているかどうかを絶えず考えながら演じています。靴を脱ぐことで作家による縛りから解放され、自由になることができるのです。性的な印象というあなたの感想は正しい解釈だと思います。裸足で床を触ることが、次に出てくる「裸の女王様」の思い出を引き起こしていきますから。

東京公演での笑い

学生E：とんでもないものを観てしまったと思いました。これから生きていく中で、ずっとこの作品と付き合っていかなければならないと感じています。うまく言葉に出来ないのですが、4時間20分を通して愛のリアリティを感じられるくらい、生の世界と接することができました。

ルパ：実は昨日皆さんがご覧になった上演に私は満足していません。特に後半は私の狙いから逸れてしまいました。第2幕は即興の要素が多く、毎回俳優たちが自由に台詞を付け加えていきますが、昨日の上演では俳優たちの演技があまりにもネガティブでした。自分が演じている人物を守るのではなく、悪態をつくとか、何かを憎んでいるようでした。私はこのような演技方を必ずしも認めることが出来ません。

ネガティブな印象を持つ相手がいれば、その人に対して我々は愛憎を抱きます。ところがその場から外へ出て自分の言葉で書き始めると、急にその人たちのことが好きになる場合があります。うまく説明できませんが、私自身もそういう経験をします。最後のモノローグでベルンハルトは「いや私は彼らのことを愛してい

る」と語りますが、東京の観客からこのシーンで笑いが起こったことはとても面白く、なぜこのような反応が起こったのかと考えてみました。もしかすると日本の方は憎んでいた人を突然好きになるということが理解できず、当惑されていたのではないのでしょうか。私たちヨーロッパの人間としては、このベルンハルトのような考え方はよく分かるものです。ある人間に対して度を越した攻撃をしてしまった後、すぐに自分も結局はあの人たちと同じような人間なのだ気づく。責めていたものは彼らではなく、実は自分の自我であり、自分の中にある欠点と戦おうとしていたのだと。我々はよくそういったことに気付く経験をします。

パーティーを成功させようと必死になっているマヤを見ながらベルンハルトは「彼女は本当のことを言っていない」「誠実に欠ける」と散々悪口を言います。ですが2幕の最後で2人だけが残されると、急に自分の目の前にいるマヤが、絶望感に取り憑かれた老女にすぎないことに気がつきます。歌手としての成功を取められずに歳を重ねてしまった絶望感、パーティーが失敗してしまった絶望感、アル中の夫を抱えて生きていかなばならない絶望感。すると2人がまだ若く親しかった頃の思い出が蘇り、これまで感じていた嫌悪感が急に共感に変わります。この人とまた近しくなりたいという願望が生まれ、同情を感じるようになるのです。

非妥協的であること

学生F：私もそのシーンのことが気になっていました。檻の囲いの中にいる人々のことを「彼らは妥協して墮落してしまった」と罵倒し続けていたベルンハルトに、最後の最後で愛しい思いが生まれる。それを見て私は、彼も歳をとって妥協の方に傾いて、囲いの中の人間になってしまうのかなと思いました。でも最後に彼は妥協せずに『伐採』を書くという道に走る。その爽やかさに少しほっとしました。

ルパ：人はいかに非妥協的であろうとしても、他の人と生きていく限り妥協的であらざるを得ません。最後の場面でマヤを目の前にしたベルンハルトは、こうして自分はまた妥協の世界に入ってしまうのではないかと感じます。そして彼女はやはり罌であり、そこに嵌るとまた彼女に依存してしまうと危機感を感じます。そこから逃れるために、彼は自分の汚れたものを(彼のよく使う言葉を借りれば)「消毒」し、浄化するのです。そして自分の本当に守りたい価値を守る。罌だと感じて逃げること、これはベルンハルトの作品に度々出てくるモチーフです。そんな自分の非妥協性に対して、彼は大きなツケを払わなくてはなりませんでした。それは孤独な生活であり、芸術界の人々から憎まれる存在になる



『Woodcutters — 伐採 —』

Photo: Jun Ishikawa

ということでした。それは彼が遺書で自分の死後に作品の発表や戯曲の上演を全て禁じたことへと繋がっていきます。

ベルンハルトは実の母親と実の父親が結婚しない状態で生まれた子供でした。その後母親は別の男性と結婚し、妹と弟が生まれます。そんな3人兄弟の中で、彼は残りの2人に対して不信感を持ちながら育ったそうです。あるときベルンハルトの誕生日に、妹が危険な崖まで行って花を摘んできてくれました。ところが彼はその花を見て「そのあたりの市場で買ってきたんだろう」と言い、妹を傷つけてしまう。ですがその後、苦勞して花を取りにいった妹に対して屈辱を与えてしまったことに気がつき号泣したという話を聞いたことがあります。彼はそういう人間だったんです。

——お話は尽きませんが、時間になりましたので、これで終わりにしたいと思います。

ルパ：皆さんの大学生活が実り豊かなものになりますように。そして皆さんが夢を叶えられますように。夢を実現するには、非妥協性を守りつつ、他の人々に対して開かれたような気持ちになることが大事です。とても難しいことですが、ぜひ実現してください。(通訳：久山宏一 [ポーランド広報文化センター])

『Woodcutters — 伐採 —』

翻案・美術・照明・演出：クリスチャン・ルパ

原作：トーマス・ベルンハルト

10月21日 [金] — 10月23日 [日]

東京芸術劇場プレイハウス

1980年代から現代のポーランド演劇を築いてきた演出家であり、20世紀ヨーロッパ最後の巨匠とも評されるクリスチャン・ルパの4時間20分の超大作。舞台化が困難とされる作家トーマス・ベルンハルトの小説を翻案・演出した本作は、自殺した女優の葬儀後に開かれた「アーティストック・ディナー」会場が舞台。招かれた芸術家たちは、いつ終わるとも知れぬ晩餐会で互いの不平不満や自慢の応酬を繰り広げ、やがてアーティストの偽善性、国立劇場、国家体制を痛烈に批判し始める。音楽・空間設計にも長けたルパは、辛辣な言葉をラヴェルの「ボレロ」と共に過熱させ、まるでガラスボックスのような回転舞台と映像を巧みに用いて、登場人物の心理描写に深みをもたらした。偏った政治状況と理念を失った芸術に対してベルンハルトが抱いた嫌悪感は、国家が文化・芸術の価値観を押しつけ始めている現代ポーランドのみならず、画一的な価値観に傾倒している現代社会にも警鐘を鳴らした。

クリスチャン・ルパ Krystian Lupa

演出家、舞台美術家、作家

1943年生まれ。物理、絵画、グラフィックデザイン、舞台演出を学び、76年ムロジェック『屠殺場』で演出家デビュー。劇作、演出のほか美術・照明デザインも手がける。80年以後は国立スタリイ劇場を拠点に創作活動を行い、主にロシア、ドイツ、オーストリアの作品の翻案・演出に取り組む。特に舞台化が難しいとされるトーマス・ベルンハルトの戯曲・小説作品の翻案・演出では『イマニュエル・カント』、『石灰工場』、『消去』、『英雄広場』などで高い評価を得ている。近年の主な作品に『Factory 2』、『Persona. Marilyn』、『Waiting Room. 0』など。

井手茂太×参加者

日時 | 10月23日 [日] 15:30—16:15

会場 | にしすがも創造舎体育館

——今日は『シカク』（男性版／女性版）で、振付・演出を務められた井手茂太さんにお越しいただきました。先ほどまで公演が行われていた劇場をお借りしてのトークですので、まだ感覚も新しいと思います。素朴なことでも構いませんので、参加者の皆さんから何か質問はありますか？

男性版・女性版での受け取り方の違い

参加者A：『シカク』の男性版・女性版の2バージョンを鑑賞したんですが、まったく違う印象を受けました。どういった方針で振付をされたんでしょうか？

井手：今回は企画の段階から、少人数かつダブルキャストでやりたいという構想があったんです。でも男女混合でただのダブルキャストにしても面白い。そこで男女別の2バージョンにして、振付・構成を同じにするとどう見えるのか実験してみようと思いつきました。実際にやってみて分かったのは、醸し出すニュアンスが違うということ。たとえば女性は振りを揃えるのが上手いですが、男性は揃えていても連帯感や会話が見えないんです。そういった違いから自然と立ち上がる空気感が異なっていたのが面白かったですね。

参加者A：稽古はどのように行われていたんでしょうか？

井手：基本的には男女同時に振付をして、一緒に稽古していましたね。振りによっては体格の違いでやりづらい動きもあるので、少しずつ修正しながら創作していきました。

参加者B：私は男性版・女性版の違いについて、女性版よりも男性版の方が「骨」の存在を感じました。

井手：骨？ 骨ってなんでしょう？

参加者B：「ああ、身体に大きな骨が入っているんだな」と感じたんです。女性版と見比べたときに、ダンサーの動きや体格の違いからはあまり差を感じなかったんですが、なぜか骨の違いを強く意識しました。

井手：面白いですね。

参加者C：少し違う観点からの質問です。衣装が女性版は攻撃

的な色合いで、男性版は落ち着いた色合いだったかと思います。いわゆる「男性」「女性」のイメージとは逆の印象を受け取りました。たとえばLGBTなど、性差の問題と関係があるんでしょうか？

井手：僕自身は作品をこう見せたいとか、こう伝えたいというメッセージをあまり持っていません。だからこそ皆さんから「骨を感じた」など、思いもよらなかった意見を聞くと面白いと思います。性差の問題については、今回はそこをあえて突っ込まずに作りました。ただし舞台美術の境界を行き来するラストシーンを作ったように、もしかしたら「ボーダレスでもいいんじゃない？」と伝えたかったのかもしれないですね。

参加者C：ありがとうございます。稽古を一緒にしていたと聞いて、観客が男性版・女性版を比べてしまうだけで、井手さんの中では、2バージョンをひとまとまりとして創作されていたんだなと思いました。

実体験がもたらすアイデア

参加者D：私は『シカク』の2バージョンの「匂いの濃さ」の違いが面白く感じました。もしかしたら人との距離感の違いと言い換えてもいいかもしれません。私は女性なんですが、女性版に共感した一方で、男性版の方が日常感覚に当てはまるのが多かったのが新鮮でした。

井手：たとえば「うんうんうん」と相槌を打つシーンを作りましたが、相槌ひとつをとっても言い方や距離感によってニュアンスの違いが生まれます。皆さんも一度は店員のお姉さんが過剰に相槌を打ってきて「聞いてないな」と思ったことがあるのではないのでしょうか。そういったことを皮肉っぽく描きたかったので、男性版の「うんうんうん」と女性版の「うんうんうん〜!!!」という差には、かなりこだわって作りましたね。

参加者D：『シカク』は共同生活のなかでみえる「日常」がテーマになっていましたが、店員さんのエピソード以外に参考になった実体験はありますか？

井手：足音だけが聞こえてくるラストシーンはとてもリアルな実体験がありますね。昔住んでいた部屋の話なんです。朝4時・5時になると上の階から「ゴンゴンゴゴゴンッ」という足音が聞こえてきていたんですよ。おかげで眠れないこともあって困っていたくらいで(笑)。おそらく一人暮らしの40～50代男性が住んでいたと思うんですが、会わないまま引越してしまっただけです。今になって「あの人は何をやっていたんだろう。もしかしたら友達を呼んで踊っていたのか、それとも1人でひっそりと踊っていたのかな。」と考えるようになりました。

舞台上に四角い枠を作ったのは、オランダ滞在時の体験が大きいですね。飾り窓地区では、下着姿の女性が窓越しに道行く人を勧誘していて、怖いながらも強烈なインパクトがありました。オランダは一般家庭でもカーテンを付けていないことが多い。テレビを見ている光景やワインを飲んでいる光景が、歩くだけで目に飛び込んでくる。生活を覗き見ることが面白かったので、いつかやりたいと思っていたところ、今回共同生活という形で実現しました。

参加者E：窓に関連しての質問です。劇中で窓を開けたときには外から虫の声が聞こえていたと思うんですが、冒頭のシーンだけ強風が聞こえていましたよね？ あれはなんだったんだろうと、ずっと考えています。

井手：ミステリーですよ！ なぜでしょうね？ そこなんですよ(笑)。実は冒頭で少しだけホラー的なイメージを入れたかったんですよ。ただ、もしかしたらあの風は隙間風を大きさにしただけかもしれないし、霊的なものかもしれない。さらにいえば、物件自体もシェアハウスなのかそうでないのか、マンションなのか民家なのか、都会なのか田舎なのか。そういった想像力の可能性を引き出すように作っています。

日常の動きをどう振付にするか

参加者F：僕は『シカク』の女性版から、日常の所作の色気を感じました。その人の「癖」のような動きは、どのように振付に取り入れているのでしょうか？

井手：たとえば女性ならではの癖ってありますよね。こういうのとか。(髪を触る仕草をして)

一同：(笑)

井手：ただ立っている時でも足を組み替えるだけで雰囲気が変わりますよね。稽古ではいろんなアイデアを試しながら自然に見えるかどうかという基準で動きを選んでいきます。

参加者F：そういった動きは井手さんから提案するんでしょうか？ それともダンサーにアイデアを持ってきてもらうんでしょうか？

井手：まず僕の中にある作品のイメージに従って、キャストや登場人物の設定を決めるんですが、そういった素材をもとにダンサーに自由に動いてもらって、セッションをしながら振りに落とし込んでいきますね。

参加者G：具体的にはどういった踊りが井手さんの琴線に触れるんですか？

井手：僕はいかにも練習しましたという踊りは好きではありません。ガチガチに振付をされた動きも商品としては成立するし、それはそれで良いと思います。ですが僕はそれよりもその人から生まれる「その人らしい動き」が見えたときに魅力に感じるので、それを大切にしています。

参加者G：作品を見て、いわゆる「ダンス」というよりも、「会話／生活の延長線上のダンス」という印象を受けたので、その人らしい動きがよいと聞いて腑に落ちました。

井手：たとえば一般的には振付をするときに、カウントを使って踊りを教えます。「ワンツースリーエンドワーン!」とか。ですが、そうすると計算になってしまうので、あまり使っていません。僕の場合は「大きなスイカ割っちゃった! ああ!」とか「この辺で掃いた! そしたら拾う!」とか、振付を行為にたとえながら伝えていく。それでたまたま音にはまったら音にはめる。僕がやっているのはそんなことです。

参加者G：井手さんのワークショップを受けたいなと思いました!



井手：最近は出来ていないんだけど、ぜひ来てください。楽しいと思います。

音楽と振付の関係

参加者H：『シカク』は音楽をもとに振付されたのか、振りを決めてから音楽をはめたのか、どちらなのでしょうか？

井手：今回は音楽が先に出来ました。音楽を担当している「ASA-CHANG & 巡礼」には、依頼段階で音のニュアンスやイメージを伝えて、音楽を作ってもらっています。たとえば少し怪しい感じの曲があってから、分かりやすいテンポの曲で終わっていききたいとか、そういったことです。

音楽との関係についても少しお話ししましょうか。音楽がかかっているなかで踊るほうが、ダンサー自身も見ている方も楽しい。ですが音楽を

流し続けた状態で1曲ずつショーケースのように踊っていくと、それはダンスの発表会になってしまう。私たちはダンスのテクニックを披露したいわけではないので、そういった音の使い方はしていません。たとえば1人のダンサーがもう1人をじーっと見るシーンは、日常の動きを面白く捉えるためにあえて音楽をつけないで作りました。実際にコンビで万引きを捕ま

えた瞬間に遭遇したことがあるんですが、万引き行為をじーっと狙っている人の音は、僕の中では「キーーーーーン」なんですよね。日常にある些細なことでも、音や振付で遊びながら作品に取り入れています。

照明による演出効果

参加者I：私は普段、照明を担当しているのですが、ナトリウム灯を使っていたらしゃつたことが印象に残りました。こういった効果があったんでしょうか？

井手：照明は齋藤茂男さんに頼んでいるんですが、実は僕と齋藤さんはナトリウム灯が好きなんですよ。ナトリウム灯はセピア色の光を放つので、時間軸を曲げたり、錯覚させたりする効果をもたらします。オープニングで使うと「もしかしてエンディングを先にやったんじゃないか」と意識させることも出来る。『シカク』では場面展開を速くして説明を省くような構成になっているので、そういったナトリウム灯の効果を狙って使用していました。せっかくなので今つけてみましょうかね。(照明チームにお願いしてつけてもらいながら) 普段なかなか気付いてもらえないので、指摘してもらえて嬉しいです。

参加者I：ありがとうございます。ナトリウム灯ってつくまでに時間かかりますよね。

井手：そうなんですよね。それがかわいいんです。



『シカク』

Photo: Marie Nosaka

参加者I：しばらく経たないとセピア色にならない。

井手：そう！ その過程をわざと見せることもできる。(ナトリウム灯を見ながら) いいよね。

参加者I：すごくいいですね。

井手：過去作品でもナトリウム灯を使っているんですが、灯体を落とす演出もしたことがありますね。提灯みたいでした。

なぜ振付家なのか

参加者J：井手さんの死角／Blind Spotなどところを覗く行為になると思うんですが、井手さんはどうしてダンスをやられているんでしょうか。

井手：どうしてでしょうね。得意とすることがこれしかなかったんですよ。唯一褒められたのが踊りだった。昔からちょっと変わっている子で、こういう風にしたら絶対面白いという直感があって、偉そうなわけではないんだけど人を動かすのが好きだったんです。ダンサーを目指して東京に来る人が多い中、僕はダンスを作りたいと思って上京して、イデビアン・クルーを始めました。今は普通にダンサーとしても出演していますが、10年間出演していなかったくらい、作ることが好きなんです。それで今も続けていますね。

参加者J：カンパニーでの創作とは別にCM・ミュージックビデオの振付のお仕事もされていると思うんですが、それはどういった感覚なんでしょうか？

井手：お仕事をいただけるのはありがたいことですよ。ただ先方からこのやり方がいいと指定されると、業者のような考えで作らなくてはいけないので、難しいこともあります。振付家の仕事は不思議なもので、何でもできると思われているんです。たとえば「タップダンスを入れてください」と言われてもできない。演劇の現場に入っても、誰かが足をつると全員がバツと僕を見てくるんですよ。

一同：(笑)

井手：体育の先生じゃないからできないよとかね(笑)。僕の場合は得意分野に特化したタイプなので、全ジャンルの踊りができる「振付師」ではありません。それなのである程度お任せしてくれると有難いですね。逆にそうでないオーダーは断っています。

にしすがも創造舎の空間

参加者K：この建物(にしすがも創造舎体育館)の中にこの舞台美術があるのが良いと思いました。とくに床に引いてある白線が、舞台美術と繋がっているように見えたことが面白かったです。

井手：前にこの建物で作品を作ったのは2009年の『挑発スタア』でした。その時もこの空間をブラックボックスにして客席を組んだんですが、体育館のポテンシャルをフルに使いたかったので、あえて「体育館らしさ」を見せるような演出をしました。今回はにしがも創造舎が今年でクローズすることもあるって、体育館の最後の姿を丁寧に見せたいと思っていました。そのためには正面からだけではなく両サイドから見ても楽しめるような客席のほうがいいだろうと考えて、真ん中に舞台美術を置くことを決めた。さらにこの空間に舞台美術が浮いているように見せるために、少し床を高くして、照明でハレーションで体育館の床が光るようにしたわけです。照明という点では、観客が「天井がドーム型になっている」と気付くように、照明で天井を照らして、体育館の最後の姿にスポットライトをあてました。それだけ思い入れが強かった。

参加者L：実はみんなで感想を共有していた時に、なぜ床が光るのかについて話していたんです。私は日本家屋の軒下だからかと考えていたんですが、他の人の感想で「ここはマンションの高層階で、床の光は下の住人の明かり。それまたシカク／死角である。」という意見がありました。

井手：面白い着眼点ですね。そういったことも考えられるし、他の可能性も考えられる。観客にはある程度自由に見てほしいなと思っています。

『シカク』

振付・演出：井手茂太

10月21日【金】—10月29日【土】

にしすがも創造舎

日常にある動きや人間関係をユーモラスに切り取る振付で、多方面から評価を得ている井手茂太が主宰するイデビアン・クルーの新作を上演。学校の体育館という自由度の高い空間を利用し、間取り図を思わせる4つの部屋と共用スペースを有する住居を舞台とした。共用スペースでのリズム溢れるユニゾンや、ひとつの部屋で4人が密集して行う激しいダンス、会話を繰り返す場面など、この舞台ならではの演出がちりばめられ、時には会場から笑い声が聞こえた。構成と振付はほぼ同じでありながら、男女4人ずつのダブルキャストによって上演されたため、別バージョンも見ようと、再度足を運ぶ観客も多かった。音楽はASA-CHANG & 巡礼により全曲が本作のために書き下ろされた。リズムカルでポップな音楽から、生活音をモチーフにしたものまで、様々な楽曲が作中で使用され、作品にシナジーを生み出した。

井手茂太 Shigehiro Ide

振付家・ダンサー

ダンスカンパニー「イデビアン・クルー」主宰。既存のダンススタイルにとらわれない自由な発想で、日常の身振りや踊り手の個性を活かしたオリジナルティ溢れる作品を発表し、国内をはじめ、ドイツ、フランス、イギリスなどの23都市、のべ34箇所作品を上演。また振付はもとより、個性派ダンサーとしても注目を集める。近年では、椎名林檎、星野源等のMVの振付や出演、シェイクスピア『テンペスト』(白井晃演出)、NODA・MAP『逆鱗』(作・演出：野田秀樹)などの演劇公演の振付やステージングも手掛けている。

ファイルズ・スレイマン×ロスリシャム・イスマイル(イセ)×参加者

日時 | 10月24日 [月] 13:30—15:00

会場 | 国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟練習室41

ゲスト | ファイルズ・スレイマン、ロスリシャム・イスマイル(イセ) 通訳 | 横山智子

内容 | F/T16主催プログラム アジアシリーズ vol.3「マレーシア特集」参加アーティストであるファイルズ・スレイマン、ロスリシャム・イスマイル(イセ)の2名を迎え、参加者向けのスペシャルトーク・ディスカッションを開催。マレーシアのアーティストと交流しながら、同国の文化や社会・歴史を背景としたアートシーンや文化の違いについても理解を深める。

プレゼンテーション

はじめにファイルズとイセの活動紹介を行った。ファイルズはマレーシアの伝統的な影絵を現代的にアレンジした作品などについて語り、イセは代表作であるマレーシアの家庭に伝わる料理や伝統を保存する「The Langkasuka Cookbook」などのアートプロジェクトを紹介した。

グループワーク

5～6人のグループにわかれ、「もし、私たちがファイルズ、イセと一緒にマレーシアでプロジェクトをするなら、どこでなにをやりますか?」というお題に沿って、マレーシアのお菓子を食べてつディスカッション。参加者のほとんどがあまり馴染みのないマレーシアについて、自分たちの生活や興味に引きつけながらアイデアを出し合った。

各チームの発表

各グループで出たアイデアを、模造紙を見せながら発表。バスの窓を使ってファイルズの映像作品を上映する、世界のさまざまな地域の人にイセの「Cookbook」に塗り絵をしてもらうなど和やかな雰囲気の中で、参加者たちの個性あふれるアイデアを共有した。

ファイルズとイセからのフィードバック

それぞれのアーティストやマレーシアの特性を活かした、若い世代ならではの柔軟な発想に刺激を受けた2人。参加者たちのアイデアを大絶賛していた。最後にファイルズとイセから、実際に共同制作やプロジェクトを企画するときに大事なことをアドバイス。「自分を信じること」、「仲間を大事にすること」などシンプルで力強いメッセージが届けられた。



参加者へのメッセージ

イセ: F/Tキャンパスのプログラムに招待されたことを光栄に思います。最初は私の作品についての知識がほとんどない日本人の学生たちと、ワークショップの経験の少ない私が一緒にやることで、どんなことが起きるんだろうと思っていました。私の仕事は人と人をつなぐことですが、個人的なことを扱っています。なので、お互い少し緊張していたかもしれません。でも、私はいつも魔法を信じています。アートは人とつながる魔法です。私とファイルズが作品について説明し始めたら、参加者の素晴らしいエネルギーを感じることができました。本当にクールでした!「もしマレーシアでイセとファイルズとプロジェクトをやるなら?」というテーマに彼らは素晴らしいアイデアを出してくれて、はっとしました。正直に言って自分の作品は、自分のアイデアだけですでに完結していると思っていましたが、それは間違いでした!私と世代の違う、情報社会に慣れ親しんだ参加者たちは、私のプロジェクトを斬新なアイデアで生まれ変わらせることができるのです!彼らがすごくうらやましいです!(笑)。F/Tキャンパスのプログラムに参加できたことをとても幸運にも思っています。私が参加者からインスピレーションを得たように、参加者もこのワークショップから何か得るものがあればいいなと願っています。

ロスリシャム・イスマイル(イセ)

Roslsham Ismail (Ise)

1972年コタバル生まれ。マラ工科大学卒業。都市コミュニティにおける個人的な経験と大衆文化をもとに創作する現代美術家。インスタレーション、ビデオアート、参加型プロジェクトなどその表現方法は多岐に渡る。主な作品にマレーシアの家庭に伝わる料理や伝統をテーマにした「The Langkasuka Cookbook」(2012)は、英国統治時代に国境が引かれたマレーシアとタイの狭間の地域で生まれた軍隊の食事マウンテンライスを、その土地で暮らす祖母の昔の記憶を頼りに、レシピとイラストをまとめ一冊の本にするというアートプロジェクト。またシンガポール・ピエンナーレでは地元の各家庭の冷蔵庫の中身を展示するインスタレーション作品「Secret affair」(2015)を発表し、食を通じて、その土地で暮らす人々やコミュニティ、生活様式や文化を浮かび上がらせる作風で知られている。

ファイルズ:参加者のアイデアに本当に感銘を受けました。マレーシアについてあまり知識がないのにもかかわらず、マレーシアで実現できればきっと受け入れられるようなアイデアがたくさん出てきました。日本人の学生たちが、マレーシア特有の食事や文化についてディスカッションをし、自分たちのプロジェクトに変換していくのを見ていて、嬉しい気持ちでいっぱいでした。彼らのアイデアは、彼らの文化的背景だけでなく、若さと成熟さを活かしていました。もっとアイデアを発展させる時間があれば、きちんとプロジェクトとして実現することが可能だと思います。このワークショップは学生たちの勉強のために行われたものですが、僕も彼ら同様、もしかしたらそれ以上に得るものがあつたかもしれません!この素晴らしいF/Tキャンパスのプログラムを影ながら支えている事務局にも感謝を申し上げます。僕ももう一回学生になれたらいいのに!

ファイルズ・スレイマン

Fairuz Sulaiman

1982年アタリン・ジャヤ生まれ。ビジュアル、マルチメディア・アーティスト。マレーシアのマルチメディア大学MMU Cyberjayaで映画とアニメーションを学ぶ。主にアナログな手法を用いながら、デジタル様式も取り入れる作品で、インディーズバンドのミュージックビデオの制作、短編映画のアニメーションの制作、音楽イベントでのVJ、舞台演出など幅広い活動を展開している。日常に溢れる物事を主題として扱い、ライブに近いかたちで様々な作品を手掛ける。ユーモアにあふれた親しみやすい物語や手法の中に、シニカルな社会的なメッセージが込められた作品はマレーシアのアート関係者の中でも高い評価を受けている。Digital Art + Culture (DA + C) フェスティバルのプログラマー・ディレクターも務める。



マレビトの会『福島を上演する』稽古モニタリング

日時 | 10月24日 [月] 10:30-12:30

場所 | 国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟練習室41

ゲスト | マレビトの会

内容 | F/T16主催プログラムのマレビトの会『福島を上演する』の稽古を、F/Tキャンパス参加者が観客としてモニタリングする。普段見ることのできないアーティストの稽古を見学し、マレビトの会のメンバーとディスカッションを行う。

概要説明と稽古モニタリング

まず、マレビトの会『福島を上演する』について、代表の松田正隆氏から概要を説明。執筆にあたって松田氏を含めた5人の作者が実際に福島へ向かったこと、そこで生まれた複数の戯曲を、4日間を通して上演することなどを伝えた。その後、役者たちが立ち位置を確認し、上演戯曲の1つである「福島市役所」の稽古を行った。

稽古を受けてのディスカッション

戯曲を通して上演したのち、ディスカッションを実施。松田氏からの「何も知らない状態で感想を聞きたい」という言葉に数人の手が挙がった。「コピー機やエレベーターなどの機械が登場することで、登場人物も機械的に見える」という戯曲の内容についての感想を述べる参加者もいれば「なぜ方言ではなく標準語なのか?」「舞台セットが無い中、役者は物の位置を共通で認識しているのか?」など、演出に対しての疑問を口にする参加者もいた。

「災いが起こった土地へ行き、その経験を戯曲にし上演することで、何かが見えるようにしたい。その何かは、言葉で説明のつかないものだろう。それは、原発事故などの巨大な出来事につながる契機であると同時に、災いを常識や良識で定義づけようとする権力構造への抵抗となる」と答えた。役者や戯曲の作者からも意見が飛び交い、議論が深まった。

マレビトの会 marebito theater company

2003年、舞台芸術の可能性を模索する集団として設立。代表の松田正隆の作・演出により第1回公演『鳥式振動器官』を上演する。09年以降は、集団創作に重きを置くとともに、展覧会形式での上演や、現実の街中での上演、インターネット上のソーシャルメディアを用いた上演など、既存の上演形式にとどまらない、様々な演劇表現の可能性を追求している。



Reports

報告レポート

F/Tキャンパス終了後に、参加者全員に提出してもらった事後レポートから4本ご紹介します。

また、参加者が意思表示した将来のビジョンもあわせて掲載します。社会や芸術と向き合いながら葛藤する参加者の未来への萌芽をご覧ください。



F/Tキャンパスを受けて

国際基督教大学 教養学部 リベラル・アーツ学科 2年

石田優希子

ひとりで芝居を観に行くのが好きだ。始まる前や終わった後気ままに過ごせるし、チケットを誰かとスケジュール調整をして購入する手間もない。それに、劇についての感想を言い合うことが苦手だった。いつかあまり芝居に興味がない人と野田秀樹の公演を観に行ったとき、あまりにその感想が浅いので嫌になってしまった。また、「演劇をやっているこの子を連れていけば、解説がもらえるのではないか」という理由でミュージカルに誘われたこともあった。私にとって演劇はひとりで楽しむものだった。

それが、キャンパスのあとがらりと変わった。F/Tキャンパスでは観劇の後、自分の考察、感想を寝る間を惜しんで語り合った。なんと刺激的で、深いディスカッションなのだろうと思った。なかには演劇を普段そんなに観ない人もいたが、その場にいた全員が演劇に対して真剣に向かい合っているのを言葉から感じた。自分の考えを受け入れてくれるし、それに関してさらに視野を広げるようなレスポンスもくれる。誰かと演劇を観ることは楽しいのだと気づかされた。

スタッフの方々が言っていたことだが、「演劇に興味がある大学生の交流」がF/Tキャンパスの目的のひとつでもある。実際、私には多くの出会いがあった。日本で演劇の研究をしているひと、今回のキャンパスなど様々なイベントを作り上げているひと、劇団の主宰をする大学生、ポーランドの演出家……。そういった演劇が好きの人々と話すことで、「私はひとりじゃない」と思った。私は大学で演劇サークルに所属して、休みなく何かしらの演出やスタッフ、時にはキャストをやっている。皆本気で取り組んではいるものの、将来の進路に演劇を考えている人はあま



りいない。また、私の通う大学では演劇を専攻することができない。演劇に関する授業もあるにはあるが、せいぜい5つくらいだ。だから、演劇について専門的な勉強をしている人間に会うことは私にとって本当に新鮮だった。こうして演劇の話は何時間しても飽きない、私と似た人たちが近くにこんなにいるのだ。私はひとりじゃない。

ひとりじゃないことに加えて、私は自分の中にある、ある種の焦りにも気づいた。観劇する芝居の数、持っている知識の量、どれをとっても私は劣っていると感じた。とても悔しかった。それは私にとって、自分が観る演劇を浅くしか味わうことができないということだからだ。もっと知りたい。もっと観たい。もっと変わりたい。めらめらとそういう意欲が燃え立った。

演劇と自分について見つめるためには、これほど良い機会はない。参加して本当に良かったし、誰かに勧めたいと心から思う。特に、かつての私のように、演劇と向かい合うとき孤独を感じているひとには。

→ 3年後のビジョン

留学に行ったぶん卒業が伸び、大学五年生をしている。

→ 5年後のビジョン

高校の教員になって、授業に演劇を取り入れている。

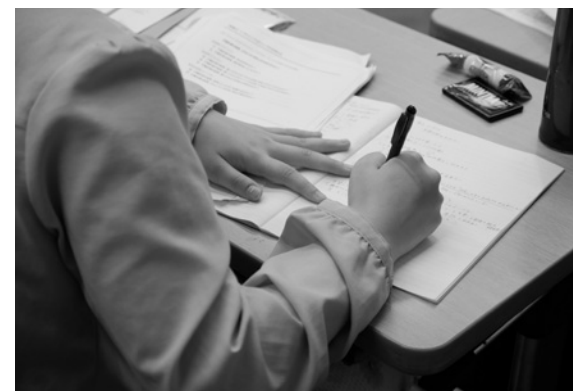
F/Tキャンパスを受けて

東京学芸大学 教育学部 教育支援課程 表現教育コース 2年

寺田 凜

いま、終了後約一ヶ月が経って思う「F/Tキャンパス」は、その外的世界やそのあとの日々を全て忘れさせるほど濃密だった。帰りの電車でも、全速力で走り終えたあのように頭がぼうっとしていて、翌日からの時間割がうまく思い出せなかったのを覚えている。

初日、明るい会議室で円く椅子を並べて参加者の顔を見渡した。たくさん知らない顔があり、これから始まるプログラムの一つ一つにワクワクしていた。しかし、待っていたのは想像していたほど楽しいだけの時間でもなかった。観劇し、話し合い、アーティストのトークを聞き、ゼミを受け、議論し……というのを朝から晩まで休みなく繰り返した。今までこんな経験はなかったし、参加者一人一人がそれぞれ自分の強い思いを持っており、話しているとその勢いに押し流されそうになる。ゼミでも、私はなかなかスピードの速い議論についていけず、ただみんなの



→ 3年後のビジョン

3年後の2019年11月、わたしは(3年生終了後、1年間休学をしたため)大学卒業を目前にしている。「創造的な場作り」をテーマにした卒業論文の最後の追い込みをしている。興味を持っていた会社へエンジニアもしくはデザイナーとしての就職が決まっているが、わたしはそこで1年働いたのち、本格的にアート・マネジメントを学ぶため留学する予定だ。TOEFLのスコアは既に受け入れの基準を満たしている。春に日本初のコントラダンスのイベントを開くための計画をしている最中。

生き生きとした表情を眺めていた。

そんな悔しさのあと、マレーシアのアーティストとの交流があった。彼らは、決してとても美しいというわけではない英語で、自分のプロジェクトのこと、作品のこと、私たちに語りかけてくれた。彼らがアーティストとしてやっていることは、とてもシンプルなことのように思え、その分コンセプトにも共感できた。前夜まで、舞台作品の端々に偏在する細かい要素をつまみ上げては捏ねくり回すような議論をして頭が疲れていたせいもあり、彼らの明るい発想と「彼らとコラボレーションするなら何を？」というグループワークは、短い時間ではあったが、私を解放してくれた。東南アジアのアートは、分野として今までさほど興味も持てずにいたが、欧米にはない感覚と自由さと、なにより明るさが滲み出る、いまの私が求めているものだった。

何をしなければいけないと決まっているわけではない。でも、自分はなんとなく、周りからの影響で日々凝り固まっていて、同じようなものばかり見て、同じようなことばかり考えている。ふとしたきっかけで出会ったものが、まさに自分の行くべき場所であることがある。

F/Tキャンパスを終えて、私は、「わたしの言葉で思考しなければならない。」と強く思った。ベースを人と合わせる必要はないが、今自分が考えていることを、ゆっくりとでも言語化すること、それが、考えるということだから。いろんなことをひたすら経験するだけでなく、振り返ること、ことばにすること。あと、まだ、行ったことのない国、場所へ行こうと。

→ 10年後のビジョン

10年後の2026年11月、わたしは、日本ではないどこか、にいる。おそらくシンガポール。ここで子供を産み育てようとしている。東南アジアをテーマ・拠点とした芸術祭やアートプロジェクトに関わっている。数年後にNPOの立ち上げに関わる予定。東南アジアの国々はもちろん、ヨーロッパや北アフリカ、中東、アメリカ東海岸へもちょくちょく行く。東海岸に行ったら必ずコントラダンスに行く。マルコスに会いに。

F/T キャンパスを受けて

静岡文化芸術大学 文化政策学部 芸術文化学科 4年

吉田美音子

浜松という東京から離れた地で暮らす私がこのキャンパスについて知ったのは、まったくの偶然でした。たまたま博物館学芸員課程の実習先を同じくした大学の後輩が昨年度参加していて、私に話してくれたのです。これまでに小学校の学芸会を除いて舞台に立つという経験をしたことがなく、演劇というものについて強い関心を寄せたのも大学入学後、加えて観劇はもっぱら歌劇が中心、専門は日本の現代美術である私にとって、参加は少し不安でした。けれど、このF/Tという1つのイベントのなかの、F/T キャンパスという1つのプログラムのために集まる人々はどんな考えをもっているんだろう、大学で座学は受けただけ、実際に舞台に立つ、また舞台をつくるということとはどんなものなのだろう、という未知への好奇心や新しい友人、ネットワークをつくることへの期待のほうはずっと大きかったです。

結果は期待以上の大収穫でした。東京からの参加者が多かったこともあり、前半は都市部に住む方とのさまざまなギャップが苦しかったなあというのが正直なところですが、ゼミと観劇、それに付随するスペシャルトーク、どれをとってもこんなに濃密だったことはありません。

特筆すべきこのプログラムの素晴らしいところは、なんといつでも「対話」にあると思います。観劇後に夜遅くまで多くの友

人と感想と批評を共有する、演劇について同じアプローチから向かう、作り手がすぐそこにいる…地方から単身遠征しつづける私にとって、これ以上はないほどの喜びです。特に柴ゼミにおいては、「演劇をつくる」というまったくの未経験であるイベントを、先生のフォローや仲間のアイデアによって、非常に有意義な1つの能動的経験として自分のなかに収めることができたように思います。初めてひとつの作品、とまでは呼べないかもしれない「なにか」をつくってみたとき、「すごい、演劇をするってこんなに面白いのか、みんなこんなに楽しいことやってたんだ、そりゃあ演劇を続けるはずだなあ」という感激は、きっとこの先も忘れたいと思います。「他者」と、自分ではない、けれど自分と地続きの「他者」に為ってなにかをつくる、これが演劇にしかない、演劇でしかできないこと。ゼミで学んだたくさんのことのうち、わかっていたようで、やっと自分できちんと理解したことです。

たくさん話したかった、話してみたかった人たちに囲まれて、自分はこれからどうやって演劇に関わっていこうか、どう関わっていけるのか、どう関わっていききたいか、今自分の中にはたくさんの事象と思考がないまぜになっていて、また未知の世界が広がっている、そのことに本当に喜びを感じます。

3年後、10年後というのはわかりやすく、区切りのついた時間ですが、一生かけて、いつも、いつでも、考えている人でありたいと思います。自分の軸になるものはおそらく、対話と思考（とお酒）なのだとということについて、今回のキャンパスでさらに確信が強くなりました。モノ、コトに対して、まずは常識（であると思われること）を疑い、それをきちんと言葉にすること。そしてそれが独りよがりにならないよう、他者との対話のなかで思考を調整していくこと。そのためにはアンテナを張り続けることを絶やさず、ネットワークの構築とコミュニケーションを惜みず、自分自身に常に問いかけを行う。そうして自分のなかをブラッシュアップし続けて、「芸術」というものについて、考え続けることができればと考えています。

F/T Campusとその後の自分について石山寺の青葉と自分自身をリンクさせながら最後は4日間を共にしたみなさんに伝えたいことをつらつらと。

立教大学 現代心理学部 映像身体学科 3年

川縁芽偉子

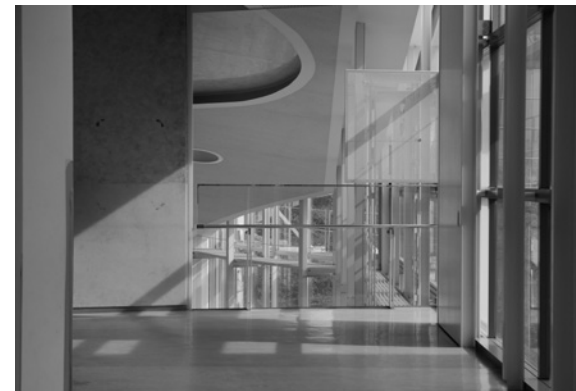
参加者のみなさんはどのような心境でF/T キャンパスに臨んだのでしょうか。私はあの時期、どうしようもない不安に苛まれていました。色々辛い時期の終盤でした。不思議なもので今は、キャンパスでたくさんの人と出会えたこともあって、結構頑張っています。

キャンパスが終わってすぐ、滋賀県に住む親戚を訪れました。滋賀県には石山寺という大きなお寺があります。紅葉がとても綺麗な場所としても有名です。色づく前の紅葉を見て、祖母が私に言いました。「青葉に別れを告げるんだね」と。今思うと、夏の匂いが残るその葉っぱたちがキャンパスでのわたしと重なっています。

〈なかなか上手く喋れない〉〈なんだか刺激が足りない〉〈どうしてこんなにも伝わらないのだろう〉。あんなに葛藤するとは思いませんでした。観ているものは一緒なのに、こんなにも感想の視点が違うのかと楽しむ一方で、個人の枠を超え人類共通の記憶のような部分に触れてはいなかったかと、大きな声で言いたかった。あなたとわたしはどこかで繋がっているのだと、言いたかった。わたしの中に静かに流れ続けてきた思惑が打ちのめされたような気分で、このキャンパスを終えました。

しかし葉っぱはひとつの生命体として紅葉を向かえます。染まることを目的としているわけではありません。“美しい紅葉スポット”として人に見られたい訳でもありません。冬になったら葉は落ち、そしてまた芽吹きます。季節が巡る中で、そうなっていました。

キャンパスで経験したひどく落ち込んだ気持ちも苛々も悲しみもすべて、ひとつの流れの中で、〈そういうこともあるよね〉と今は落ち着いて言えます。



見知らぬ人の痛みまで背負いませんか。「誰も頼んでない」「勝手なことをしないでくれ」と言われてしまうかもしれない。だけどわたしたちは今まで出会ってきた人々のために、未だ見ぬ人々のために、そうするしかないのです。全て地続きであると、そう思うのです。

にしすがも創造舎のテントの下で話しかけてくれた、夜のオリンピックセンターで語り明かした、毎日一緒に温かいごはんを食べた、『伐採』の後動けなかった、一緒に「演劇」を作った、電車の中で涙を流した、

そんなあなたの顔が浮かびます。

→ 3年後のビジョン

GOETHE ZERTIFIKAT B2
DELFT B1
合格

→ 10年後のビジョン

家庭を築く。



あとがき

横堀応彦

見知らぬものに出会い、日常生活では得られない驚きを与えること。私の考えるフェスティバルのビジョンです。作品との出会いだけでなく、一緒に考えられる仲間との出会いも同時にデザインしたいと思い、2015年にF/Tキャンパスを立ち上げました。昨年はパイロット事業としての実施でしたが、今回から主催企画の1つとして本格的なスタートを切りました。

前回からの最大の変更点として、8月から9月上旬に参加者の公募を行いました。首都圏からの参加者数とそれ以外の地域からの参加者数を1:1に近づけることが主催者側の目標でしたが、結果は28名の参加者のうち東京圏から23名、その他の地域からは5名（うち静岡から4名、大阪から1名）に留まる結果となりました。応募者数も予想を下回る結果となり、次回以降どのように改善していくかが大きな課題となっています。広報面の課題が大きいように思いますが、会期中に3連休が無かったことから平日を実施日とせざるを得ず、大学の授業を2日間（金曜日と月曜日）休まなくてはならないのがハードルだったという声も聞きました。

一度にたくさんの作品を観ることがフェスティバルの醍醐味ですが、キャンパス期間中に上演される作品数が限られてしまっていたため（前回5作品に対し、今回は2作品）、プログラムの組み立て方にも工夫が必要でした。『シカク』は男性バージョンと女性バージョンをそれぞれ観劇し、1ヶ月後に上演される『福島を上演する』の稽古見学を組み入れることで、毎日1作品は観劇できる環境を作りました。観た作品について自分の言葉で語れる（質問が考えられる）ようになるには誰しも鍛錬が必要ですが、参加者同士で話し合いながらアーティストに向き合ったトークの場はその絶好の機会となったでしょう。またF/Tトークのためにマレーシアから来日していた若手アーティストのファイルズ・スレイマンとロスリシャム・イスマイル（イセ）を招いたトークは、参加者とアーティストの年齢が近いこともあってか予想を上回る盛り上がりを見せました。彼らとの出会いを通して、国は違えども自分たちと同じ問題意識を共有している同世代のアーティストがいることを知ってもらえたことには大きな意義があったと感じています。

観劇・トークと同様に毎日開催される選択ゼミでは、柴幸男氏を実技ゼミ講師にお迎えし、理論・評論ゼミと文化政策ゼミは前回に引き続き萩原健氏、稲村太郎氏に講師をお願いしました。ゼミの実施会場については、にしがも創造舎が2016年

末をもって閉館したことに伴い変更する必要がありました。参加者が宿泊している国立オリンピック記念青少年総合センターを基本的な会場としながら、観劇スケジュールにあわせて場所を探していきました。また前回の参加者からのフィードバックの中に、宿舎に泊まった参加者と泊まらず自宅に帰った参加者との間で生活体験に差が生まれたという指摘があり、今年は参加者全員（講師の方も含め）が宿舎に泊まることになりました。今回は最終日も夜までプログラムを組み、振り返りの時間を設けたことで、ある一体感をもって4日間のキャンパスを終えることが出来ました。

ここ数年で急速に「人材育成」という言葉が使われるようになり、人材育成を専門に担当する職員を置く劇場も増えています。しかし「人材育成すべき立場にいる（私のような）人間は、人材育成されているのか？」という問題は常に自分自身に問うていかねばなりません。F/Tキャンパスも前回のフィードバックと今回の経験を経て運営面での課題は少しずつ解決されているように思いますが、そろそろ次のステップに進み、そもそもの枠組みや内容について更なるブラッシュアップを行いたいと思います。3回目となる次回では、新たな構想を練って臨みたいと思います。最後になりましたが、今回も企画実施にあたりご協力いただきました全ての皆様にこの場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。



横堀応彦 Masahiko Yokobori

東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程修了。ライブツィヒ音楽演劇大学においてドラマツルギーを専攻。2014年よりフェスティバル/トーキョーにてプログラムコーディネートを担当。現在、立教大学・跡見学園女子大学兼任講師。

F/Tキャンパス 2016

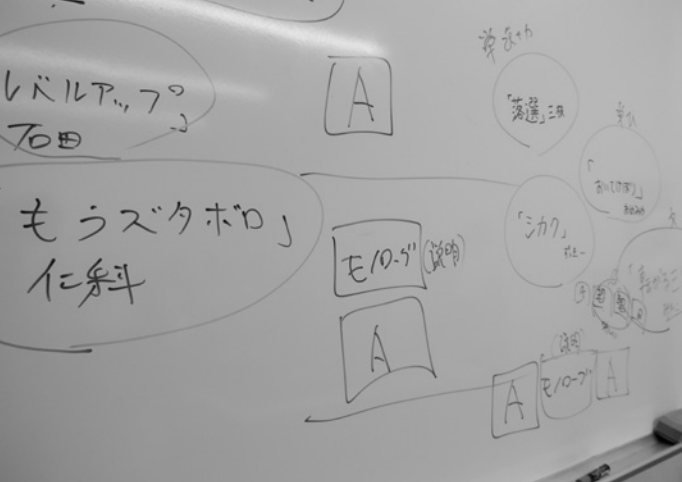
選択ゼミ講師	稲村太郎 [(株)ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室] 柴 幸男 [ままごと主宰] 萩原 健 [明治大学国際日本学部教授]
ゲスト	クリスチャン・ルバ 井手茂太 [イデビアン・クルー主宰] マレビトの会 ファイルズ・スレイマン ロスリシャム・イスマイル (イセ)
記録写真・映像	加藤和也 [FAIFAI]
企画・制作	横堀応彦、横井貴子
インターン	雨宮彩乃、篠原 光、西島彩貴
共催	国際交流基金アジアセンター (10月24日スペシャルトークのみ)



フェスティバル/トーキョー 16

主催	フェスティバル/トーキョー実行委員会 豊島区/公益財団法人としま未来文化財団/NPO法人アートネットワーク・ジャパン、 アーツカウンシル東京・東京芸術劇場 (公益財団法人東京都歴史文化財団)
アジアシリーズ共催	国際交流基金アジアセンター
協賛	アサヒビール株式会社、株式会社資生堂
後援	外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、J-WAVE 81.3 FM
特別協力	西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、チャコット株式会社
協力	東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、 一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋西口商店街連合会、 特定非営利活動法人ゼファー池袋まちづくり、池袋西口公園活用協議会、南池袋公園をよくする会、 ホテルメトロポリタン、ホテル グランドシティ、池袋ホテル会
宣伝協力	株式会社ポスターハリス・カンパニー、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

平成28年度 文化庁 文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業 (池袋/としま/東京アーツプロジェクト事業、としま国際アートフェスティバル事業)
公益社団法人企業メセナ協議会 2021 芸術・文化による社会創造ファンド採択事業
フェスティバル/トーキョー16は東京芸術祭2016の一環として開催されました。



フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

〒170-0004 東京都豊島区北大塚1-15-10 東部区民事務所3階

TEL:03-5961-5202 FAX:03-5961-5207

発行	フェスティバル/トーキョー実行委員会
編集	フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局 横井貴子、横堀応彦、砂川史織
デザイン	阿部太一 [GOKIGEN]
発行日	2017年4月1日
禁・無断転載	© フェスティバル/トーキョー実行委員会